

2019年2月28日発行
日本比較文化学会関東支部

2018年度第2号のレター発行となります。本号では、2019年2月9日（土）に東京未来大学にて開催されました「関西・中部・関東合同支部例会」での三支部会員の発表要旨、ワークショップの報告、並びに、2019年3月30日（土）に予定をしております「第50回関東支部 支部例会・2018年度総会」のご案内を掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

◆関西・中部・関東支部 合同例会 ご報告◆

2019年2月9日（土）、東京未来大学において二年に一度の開催となります「関西・中部・関東合同例会」が開催されました。当日は12名の三支部会員による研究発表と「画像解析を取り入れた印象評価分析ツールの体験ワークショップ」が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、同合同例会での会員の研究発表の要旨とワークショップ開催の報告を掲載致します。

◆開会の挨拶: 関西支部長 山内信幸(同志社大学)
中部支部長 白鳥絢也(常葉大学)

◆研究発表:

－ セッション A －

1. 日本語のやりもらい表現に見るウチとソト

防衛大学校人間文化学科 准教授
木下哲生

第2言語としての日本語の授業において、やりもらい、すなわち「あげる・くれる・もらう」の3つの動詞の文を教えること、そして教わることは非常に難しいものの1つである。これを以下のようにすることで比較的短時間で定着させることができる。①「私・田中さん・山田さん」の3人の人物に加え、私の家族のメンバーとして「父・妹」の2人、合わせて5人を板書する。②「私」の周りおよび「私」を含めた「父・妹」の3人（「私」の家族）の周りを四角で囲む。この四角の線を「シールド」と称する。③「田中さん」と「山田さん」のペアの様なシールドが間に存在しない2人（「私」から見て第三者）のやりもらいは「あげる」と「もらう」で表され、その立場は交換可能である。これを case 1 とする。④間にシールドが存在する2人のやりもらいのうち、シールドの外側の人物（田中さん）からシールドの内側の人物（私）にプレゼントが移動するやりもらいは、「くれる」「もらう」で表される。これを case 2 とする。⑤間にシールドが存在する2人のやりもらいのうち、シールドの内側の人物（私）からシールドの外側の人物（田中さん）にプレゼントが移動するやりもらいは、give が「あげる」で表されるものの、get の文は存在しない。これを case 3 とする。⑥前述の5人の間でのやりもらいは、すべて case

1 から case 3 のいずれかに該当するものとなって、すべてのケースが説明できる。⑦ただし、以下の2点については補足説明を行う。その1.「田中さんはあなたに give」に対する質問については case 2 として「くれる」を使う。これは質問に対する答えの主語が「私」となるためである。その2.「父は私におみやげをくれました。妹にもくれました」の文に代表されるように、シールドはフレキシブルなものであり、同じやりもらいの行為が「私」を含む複数の人物に行われる場合、そのシールドで囲われる人物が拡大することがある。

以上のことから、日本語のやりもらい表現は、自分及び自分が所属する集団の「ウチ」か「ソト」かを意識したものであることがわかる。その「ウチ」「ソト」を利用して場面を3つに整理することで、学びやすくすることができる。

2. 小林秀雄批評における解釈の対象は何か

—ドストエフスキー『罪と罰』論の考察を通して—

名古屋大学大学院 人文学研究科博士後期課程

川里 卓

本論文の目的は、日本の批評家小林秀雄(1902-1983)のドストエフスキー論の分析を通して、小林が批評において何を解釈の対象としているかを明らかにすることである。

ドストエフスキーの作品には、哲学的と言える思想が存在している。ただ、ドストエフスキーは、彼の作品に存在する哲学的思想を、哲学的論述としてではなく、小説という表現媒体を通して提示している。そこには哲学の著作に見られるような、体系的な叙述は見られない。

そこで、小林は、彼が作品を読む中で見た、哲学的な記述スタイルでは表現されない思想を、批評という表現媒体を通して読者に提示する。すなわち、ドストエフスキーが作った「心理造形」(『罪と罰』についてⅠ) 359頁)、つまり小林が作品を読んで実際に観た思想などを、批評で記述する。

一方で、本論で検討する文学者の山城むつみは、小林が批評においてドストエフスキーが書いた『罪と罰』を改めて書き直していると言う。すなわち、小林が原作の作者そのものとなっているのである。しかし、本稿では、小林が作者になって批評を記述したのではなく、作品で示される根本的な思想を提示しようとしていたことを明らかにする。

本論では、上記の点を踏まえ、『罪と罰』の主人公であるラスコーリニコフの犯罪哲学に関する小林の解釈に焦点を定め、そこから小林批評が何を解釈の対象としていたのか明らかにする。

そのために、本論ではまず第一章で、小林批評に関する先行研究として、山城むつみによる分析を取り上げる。それを踏まえて、第二章では、山城の見解への批判を行う。第三章では小林の『罪と罰』についてⅡ』の第二章を取り上げ、小林が作品の思想を解釈の対象としていることを示す。

3. 大正初期の子ども達による手づくり雑誌形成の時代相

—向野堅一家の『骨肉』分析に先立って—

茨城大学 教授

向野 康江

向野堅一が満州で働いていた時期に、国内に残された家族たちは、どのような教育方針を固めていたであろうか。このような父親は、堅一のみならず、日清貿易研究所出身者や東亜同文書院大学出身者たちにも多かった。彼らの子どもが国内に留まっていた場合、彼らの子弟教育は、誰に任されていたのであろうか。従来の教育史では、「個々の生育史」に立ち入ることもなく、政策・制度、教育論・運動によ

って語られてきた。そこからは、子どもの実態は見え難い。見え難いがために、近代の新興富裕層と貧困層・没落層との教育実態が混同されたままで語られることが多かった。

例えば、「朝鮮満州旅行記念」と銘打たれた1917（大正6）年8・9月号の『骨肉』では、この年の7月、朝鮮を経て父堅一の働く満州を訪れ、一カ月にわたって中国各地を旅行したことが、四男・啓助によって詳細に記述されている。（『骨肉』とは、大正初期に福岡の向野家の子ども達によって自主発刊されていた家庭内回覧雑誌である）その旅行記には、毎日の出来事が記されており、日本の満洲経営の状況に触れることになる。さらに、満洲経営の二面性を12歳の少年が書き留めているようにも見える。長い満洲旅行に子どもたちを連れていく理由はどこにあったのか、近代の教育史研究を始めるにあたって、経済的動向と家庭での教育方針・内容の関係性を追究し、従来の教育史の見解に一石投じたい。

『骨肉』には作文のみならず、凶画、漫画、書道、和歌、俳句部門もあることから、総合的な観点からの分析が必要になってくる。本発表では、『骨肉』の全体像と研究価値について論ずる前に、大正期の社会状況、『骨肉』発刊の経緯、発刊の契機を作った父親・向野堅一について紹介し、明治から大正にかけての政治的・経済的・社会的変動の中で、家庭教育がどのように応じていくのか、『骨肉』を通して時代背景について論考する。

4. 動機づけに関する一考察: 小学校英語教育を例として

東海大学湘南校舎外国語教育センター 准教授
高橋 強

今回の発表は、小学校英語教育における動機づけに関して発表することとする。動機づけには内発的動機づけと外発的動機づけと大きく分類するとこれらの二つに分けられ、それぞれの全体像ならびに特徴を明確にしたうえで、これらの理論に関して特筆すべき特徴を比較し、検討することでどちらが小学校英語教育においてより望ましいのかを述べることにする。ここでは具体的に小学校での実践例を基に自律性と関係性による動機づけに関しても触れていくこととする。また小学校英語教育において動機づけと英語プレゼンテーションとの関係について外発的動機づけとメタ認知についても、実際の例を示しながら英語プレゼンテーションにおける素晴らしい点と今後の改善点について詳細な解説を加えることとし、如何に小学校段階において、動機づけによる英語教育が重要かつ必要不可欠なことなのかについて述べることにする。

上記した通り外発的動機づけの重要性について述べた後は、内発的動機づけと英語プレゼンテーションについても述べてみたい。ここでは言語への気づきと言語意識を高めることに主眼を置いて述べることにする。一連の流れとして、英語で考え、行動し、発表するということに関して、子供たちは、一種のフロー状態が授業中に現れ、お互いの相乗効果として内発的動機づけを促進するのである。このフロー状態とグループ学習による関係についてもまた興味深い事例があるので発表時に触れていきたい。

また、子供たちが内発的動機づけを高めるものとして、子供たち自身がある題材について調査したり、関連する書物などを讀んだりDVDなどの視覚教材で学ぶことは、同時に社会や地理といった教科を英語で学ぶことにもなりCLILの能力をも伸ばすことができるのである。

最後に、これらの内発的あるいは外発的動機づけから、WTCという積極的かつ円滑なコミュニケーションを取ろうという態度が子供たちのプレゼンテーションからはっきりと見て取ることができるのである。動機づけを高め、着実に英語でコミュニケーションを図ることのできる小学校段階からの人材育成の重要性を痛感している。その意味において今回の発表は、動機づけの観点から様々な理論を考察し述べるものとする。その第一歩として動機づけを高め、英語教育の効果を上げるために小学校での英語プレゼンテーション及びコミュニケーション重視の英語教育が小学校段階では益々重要になってきているのではないだろうか。

5. 幼稚園英語教育についての一調査

—教育効果に及ぼすネイティブ講師の指導と担任のサポート—

岐阜女子大学 講師

松家 鮎美

英語で外国人と臆せず対話・議論のできる人材育成が急がれる今日、幼少期からの英語教育の重要性が高まり、多くの幼稚園が歌やゲームなどで「英語に親しみ、楽しめる」活動を行っている。指導はネイティブ講師や英語の専任講師に一任され、クラス担任はそれをサポートする立場にある。それゆえ、英語活動の効果は講師の指導力に大きく依存するが、日々園児と接し、園児個々を掌握している担任（幼稚園教諭）のサポートも軽視しがたいと思われる。

そこで、園児の英語教育に及ぼす講師の指導力と担任のサポートの効果について明らかにするために、地方都市の幼稚園5園15クラスを訪問し、講師の指導と担任のサポートの内容を書き留め、それに対する園児の反応をチェックして教育の効果を評価した。チェックは、園児が笑顔で活動に取り組んでいるか、元気よく大声で発声しているか、私語をせずに授業に集中しているか等の10項目で行った。また、講師と担任の指導法や園児との関わりについても、独自のスケールを用いて評価した。

その結果、園児が「英語に親しみ、楽しめる」ようになるかどうかは、授業中の担任のサポートに大きく影響されることが分かった。指導の中心であるネイティブ講師は、園児の反応を見ながら、園児に分かるスピードや語彙で話すことが不可欠であるが、それが不十分な場合も、担任が適時通訳をし、活動全般に参加しながら、園児の活動をリードしているかどうかで、園児の授業態度に差が出ることが明らかになった。

担任は、自分自身が笑顔で活動に加わり、園児が講師の英語を理解できるようにクラス全体へ声掛けをすることが重要であり、単に講師の指導を尊重して授業を静観したり、授業態度を注意したりするのみでは、園児の私語や姿勢の乱れが目立ち、教育の効果が上がらないことが分かった。

6. LINE における断りの構造についての一考察

早稲田大学 講師

吉田好美

LINE で使用されるのは、非対面ではあるが同期性が高く、話し言葉でもなく、書き言葉でもない「打ちことば」（田中 2014）という新たな言語であると言われている。「断り」は、対面コミュニケーションにおいて、細心の配慮をしながら行う言語行動であるが、それは非対面の「打ち言葉」でも同様であり、摩擦が起こる可能性がある。本発表では、対面でのデータと比較し、LINE における断りの構造に見られる特徴について探ることとする。分析対象は日本語母語話者間のデータで、「映画に対する断り」について LINE を用いたロールプレイをしてもらい、送信されたメッセージとスタンプを分析した。その結果4点の現象が見られた。

- ①対面では、断りを表出する前に情報要求が見られたが、LINE では、情報要求があまり見られなかった。即時性が高いが、画面に情報が残るため、情報要求の必要がないからだと考えられる。
- ②対面では「明日予定ある」等、理由のみの表出にも関わらず、勧誘者がそれを断りだと認識する現象があった。LINE でも同様で、勧誘者は理由のみで断りだと認識し、やりとりを続行していた。
- ③断りの表出の際に、1メッセージの中に様々な要素を盛り込んで送信するパターンと、要素を複数のメッセージに分けるパターンが見られた。ただし、1メッセージの場合は、必ずスタンプと共に送信していた。
- ④断りは、勧誘のメッセージの直後もしくは非直後両方に出現していた。

③のスタンプと④の非直後のメッセージは、それぞれ非対面ならではの現象であり、勧誘者に対して何かしらの人間関係維持のストラテジーが働いているということが推測された。

参考文献：田中ゆかり（2014）「ヴァーチャル方言の3用法『打ちことば』を例として」石黒圭・橋本行洋（編）『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房，37-55.

－ セッション B －

1. インフラ活用と地域文化振興に関する考察

－金沢港振興と港湾周辺地域活性化に向けた取組みを中心に－

宇都宮大学大学院 博士課程後期

長田 元

近年、日本の各地でそれぞれの地域の文化を再認識し、自らの地域をより良くする活動や観光資源として活用する取組みが生まれている。石川県金沢市では北陸新幹線の開業や金沢港へのクルーズ船の寄港増加等により、地域文化の振興に関する取組みがますます活発になっている。市議会においても活発な議論が行われている。

発表者は、地域文化に関する活動と地域経済は密接に関係しており、インフラが両者の関係を結び付ける要素のひとつであると考えている。また、これらの関係を分析することは、今後の地域文化や地域経済に関する研究の発展につながると考えている。こうした問題認識のもと、地域文化と地域経済に関する先行研究を踏まえつつ、2011年以降の金沢市議会の議事録から港湾振興と地域文化振興に関する審議の特徴を分析した。

分析の結果、港湾振興が促進されるにつれて、従来からある事業や予算の説明、施設の整備といった審議に加え、観光による港湾周辺地域の活性化や旧町名の復活に向けた取組みといった地域文化の振興や帰属意識の再認識につながる審議が発生していることを明らかにした。地域文化と地域経済の相互作用にインフラがどのように関わっているか考察する。

2. コミュニタリアニズムの限界を乗り越える

－梁漱溟の郷村建設論と江渡狄嶺の「場」論との比較を通じて－

法政大学大学院 人文科学研究科 博士課程後期

郭琿

西洋の近代化によって都市化・産業化が進み、自由主義や原子論的個人主義が特徴づけられることになった。その結果、相対的に自律的な農村型コミュニティは瓦解し、農業や林業に由来する宗教儀礼や伝統礼俗を喪失するまでに至っている。こうした社会の存在を反省し、1980年代に誕生したコミュニタリアニズムはリベラリズム思想への批判に基づいて解決策を与えようとした。

しかし、50年の論争を通じて、コミュニタリアンにおける、自我観—「他者」を対象として思考することと自己と他者との「自他合一」すること、という両者を超越する「間主観的理解」を達成しない点において、また、共同体観—「ローカルな共同体」の特殊主義が存在するため、「断裂的共同体」から「連続的共同体」に変更できない点においては、思想の限界を露呈することになった。その背後にある原因は、自然観—デカルトに始まる機械論的自然観が挙げられよう。デカルトの自然観は自然には客観

的・自律的な価値を与え、自然を精神から分離された物として認識しているのである。そのように自然を手段化する認識は、人間観・共同体観という社会全般に関わる認識に影響を与えたことは否めない。したがって、理性的な存在としての人間と、単なる物質や手段と見なされる自然との分離を肯定するリベラリズム的思考形式は、コミュニタリアニズムの人間観・社会観を支えている。

今回の発表では、このコミュニタリアニズムの限界を乗り越えんとする、中国思想家・梁漱溟（りょう そうめい、1893—1988）の「郷村建設理論」と、昭和初期の日本農政家江渡狄嶺（えと てきれい、1880—1940）の「家稷農乗学」、および「場」の哲学との関わりに焦点を当てる。とりわけ、今日の価値多元化社会におけるコミュニタリアニズム（共同体主義）の政治哲学の問題点に注目して再考察する。

3. 16-18 世紀の西洋人たちの記録にみる「籠居」する中国女性

湘北短期大学 講師

熊谷 摩耶

本発表では、西欧諸国における中国イメージの過渡期とされている 18 世紀末-19 世紀以前の中国像を検討する。16 世紀より中国に滞在、もしくは訪問した西欧人が西欧諸国に発信した中国情報は膨大なものであるが、中でも本発表では西欧人に記録され続けた中国女性の「奇習」の一つともされている「籠居」を取り上げる。「籠居」とはすなわち、外界との接触を極端に制限された女性の生活様式を示しており、西欧人たちが中国女性を街中で殆ど目にすることがなかったということが繰り返し言及されている。そこで、本発表では西欧人の手による中国女性の「籠居」の習慣への記述を通し、彼らが発信してきた中国像の検討を行う。

検討方法として、マルコ・ポーロや、中国情報の主な担い手であった 16 世紀より清朝治下の中国に滞在をしていた宣教師らの記録をはじめにとりあげる。さらに、1793 年に英国より派遣された初の訪中使節団である大使マカートニーを筆頭とするマカートニー使節団の団員らの記録を検討対象とする。マカートニー使節団の記録は 19 世紀以降の西欧諸国での中国像を変化させ、「停滞の帝国」としての中国イメージを流布させたとされている。そこで、使節団員が記録もしくは帰国後に出版した書籍を分析対象とし、「停滞の帝国」と評される以前の西欧諸国における中国イメージの一端を明らかにしたい。

4. アニメ・映画における「線路」の間テクスト性 —境界線？逃走線？それとも世界線？—

神戸大学 日本学術振興会特別研究員 PD

川崎 瑞穂

本発表では、近年のアニメや映画における「線路」の表現を比較分析することから、それらの間テクスト的な繋がりを描き出すことを目的とする。アニメ映画『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』や『千と千尋の神隠し』では、中盤で幻想的な線路が出現し、物語の展開に重要な効果を発揮する。これらの表現を映画『DESTINY 鎌倉ものがたり』や、アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』『新幹線変形ロボ シンカリオン』といった「ロボット物」と比較し、さらにはアニメ『時をかける少女』『ひぐらしのなく頃に』等といった時間論的なテクスト群も参照することで、多角的な意味論的検討を行う。

これらの線路を理解する上では、「境界線」という民俗学的な解釈がまず思い浮かぶ。線路は彼岸と此岸を繋いでおり、その越境によって物語が展開していく。しかし、映画史上で多様に表現されてきた線路は、しばしば権力からの「逃走線」（ドゥルーズ、ガタリ）としても描かれてきた。たしかに、上記テクストは海や空に架けられた類似する線路を通して繋がっているとも考えられ、「リゾーム」のように、この間テクスト的空間には出発点も到達点もない。延長線上に「銀河鉄道」（宮沢賢治・アニメ）を加え

ることもできよう。

一方、『鎌倉ものがたり』が江ノ電、『打ち上げ花火』が銚子電鉄というように、「レトロ」な電車が現在と過去、さらには未来を繋いでいるという側面もある。観る者にとってそれは過去から未来へと延びる線、すなわち「世界線」（ゲーム・アニメ“STEINS;GATE”）であるとも言える。アニメや映画における線路は「境界線」でもあり、「逃走線」でもあり、そして「世界線」でもある、いわば一種の「概念」である。本発表では最後に、人類学が近年「存在論的転回」（ストラザーン、ヴィヴェイロス＝デ＝カストロ等）として達成したような概念の他律的変容が、アニメや映画における線路を分析するために必要であることを指摘する。

5. 宮川五郎三郎の朝鮮統治策・経済策批判

－『建白書』（大正十二年・一九二三年）の考察－

向野堅一記念館館長／埼玉県立所沢西高校教諭

向野 正弘

宮川五郎三郎は、一般には、戦前の平壤の実業家として知られている。また玄洋社員としても知られる。報告では、大正12年（1923）2月16日に作成された「建白書」を取り上げる。

本「建白書」は、序に相当する「齋藤〔實〕朝鮮総督之劔北」を掲げ、本文を以下の十二章に分ける。

- | | |
|--------|------------------------------|
| 第一 | 如何なるか是れ政道 |
| 第二 | 長谷川好道の阿房宮 |
| 第三～第四 | 寺内〔正毅〕伯の治國平天下（天）（地） |
| 第五～第七 | 齋藤〔實〕總督の政道を問ふ（其の一）（其の二）（其の三） |
| 第八 | 朝鮮の産業界 |
| 第九 | 東洋拓殖會社論 |
| 第十～第十一 | 朝鮮銀行論（其の一）（其の二） |
| 第十二 | 結論 |

まず、「政道」つまり政治のしかたを論じ、その後、前半で、長谷川・寺内・齋藤の各政道の特色と問題点を指摘する。時代順ではなく、まず長谷川時代を論じ、ついで寺内時代に戻り、そして齋藤時代を論じて、自身の要望を示す。このような構成となるのは、既に寺内総督時に「建白書」を提出しているという経緯によるようである。後半では、経済をめぐる問題を論じて、特に東洋拓殖会社（東拓）と朝鮮銀行とを俎上に乗せる。

全体的に見て、厳しい批判の書であると共に、ある種の史編とみることもしできる。アジア主義に立脚する憂国の実業家は、日本の朝鮮統治をどのように見ていたのだろうか。

報告では、全体を次のような構成で整理し、報告者の関心に従って、論じることとしたい。

- I. 宮川五郎三郎の足跡（概観）
- II. 全体の構造と執筆の経緯・基本的な見方
- III. 宮川五郎三郎の朝鮮認識
- IV. 宮川五郎三郎の金融界に対する認識

6. メキシコ壁画運動における画風と影響

東京経済大学大学院 博士課程後期
塚本 美穂

本発表では、メキシコの壁画運動と牽引した画家—ディエゴ・リベラ、壁画運動に影響を受けた北川民治の画風を比較して、それぞれの画家が描く風土、生活、歴史と現代、人々の生き方を、時代と政治を背景にして考察する。具体的に、メキシコの壁画運動、メキシコ芸術における政治性、ディエゴ・リベラと北川民治、北川の画風の変化と壁画運動の影響を検討して、メキシコでの文化的適応、メキシコへの思慕、北川が好んだ壁画制作、メキシコの風土と文化を取り入れた独自の画風を鑑賞しながら、メキシコ文化との融合、日本とメキシコ芸術を融合させた画風、北川作品とメキシコの影響を検討するとともに、壁画家の影響から独自の画風を築いて、日本で創作活動を続けた作品を考察する。

北川民次は10代で渡米して美術を学び、その後メキシコで学び、メキシコに滞在して美術教育に従事した画家である。その後、帰国して妻の実家である瀬戸市に居住して、名古屋市を含む美術学園建設に尽力して、日本の美術教育および画家として活躍しながら、メキシコの画家たちを日本に紹介して、メキシコと日本の関係をつなぐ役割を果たした。自身の画風はメキシコの影響を色濃く受け継いだ。現在名古屋市美術館にあるシケイロス、タマヨ、リベラ、カーロ、オロスコ等の作品は彼の紹介なくしては、日本には存在しえない。

彼の制作意欲を高めて、新しい画風を構成するきっかけとなったのはメキシコへの再訪だといえる。それは作品に顕著に表れていて、これまで北川作品にみられた暗い画面、複雑な構成、描写される人物の複雑な表情は単一化されて、デフォルメされた単一の太線による描写、原色を用いた明るい配色へと大きく変化して独自の画風を構築したと考えられるからである。

◆ワークショップ実践報告:

・「画像解析を取り入れた印象評価分析ツールの体験ワークショップ」

京都経済短期大学 教授・森崎 巧一
湘北短期大学 准教授・高木 亜有子

本ワークショップでは、参加者自身のスマートフォンなどを用いて印象評価アンケートを容易に行える「印象評価WEBアンケートツール」の体験、及び、デザイン画像に含まれる色や形の情報を分析する「画像解析ツール」と、画像解析結果を取り込んで印象情報の分析を行える「主成分分析ツール」の実演を行った。

具体的なワークショップの流れとして、まず、本研究の内容について紹介し、次に、参加者にスマートフォンやタブレットなどを用いて印象評価アンケートを容易に行える「印象評価WEBアンケートツール」を体験して頂いた。そして、デザイン画像（本ワークショップではコーヒーカップの画像を扱った）に含まれる色や形の情報を分析する「画像解析ツール」の実演と、画像解析結果を取り込んで印象情報の分析を行える「主成分分析ツール」の実演を行った。最後に、質疑応答を行い、簡単なアンケートに回答して頂いた。

質疑応答の時間では、以下のような質問があり、その場で回答を行った。

(質問) 印象評価アンケートの回答数を増やすことに意味はあるのか。

(回答) 印象評価アンケートの回答数を増やすことによって、データの信頼性が上がる。

(質問) 男女や年齢などの属性情報の追加が可能か。

(回答) 属性情報は追加可能である。

(質問) 画像解析を自分の研究で活用できるか。

(回答) 一般利用が可能な画像解析ツールは、本年夏頃を目標に現在開発中である。

(質問) 日本文化と中国文化の違いについて本ツールを用いて調査できるか。

(回答) 文化研究の調査にも利用可能であり、是非活用して頂きたい。

(質問) 画像解析結果において、性質の異なるコーヒーカップの画像だが同じ色相がある場合(例えば、同じ青色がデータとして出てきた場合)、それらの違いをどう解釈すれば良いのか。

(回答) 現状のツールではその点がうまく対応できていないので、将来的には明度や彩度といった情報の表示も追加の機能として盛り込む。

アンケートでは、回答数18件のうち、本ツールを教育や研究に活用してみたい人は13件あり、多くの参加者が教育・研究で本ツールを活用することにポジティブであった。Noを回答された方も、ツールに対しては興味を持っておられ、好意的な感想を頂いた。また、ツールの活用方法については、絵画や風景、ファッション、音楽、音、色彩などの芸術やデザインに関係する分野に活用できるとの意見を頂き、さらには、文化の比較、人の表情や態度、姿勢、レポートやスピーチの評価などに活用できるとの意見も頂いた。特に、紙ベースのアンケートと比べて集計や分析が簡単かつ素早く行える本ツールの機能について高評価を頂いた。問題点としては、QRコード以外のログイン方法の必要性、アンケート回答での疲れない工夫、将来実現して欲しい点としては、自分の評価と他者の評価の比較分析、地図の分析やビデオ解析への対応などであった。その他の個別の質問やご要望、研究協力などについては、今後も継続して順次対応していく予定である。

謝辞

本ワークショップにご参加頂きました皆様、誠にありがとうございました。

本研究の画像解析ツールの開発では、京都経済短期大学の小路真木子氏に多大なご協力を頂きました。感謝申し上げます。

そして、コーヒーカップを快く撮影させて下さったcafé LINDENの吉田正治氏、写真撮影と画像編集にご協力頂いた寺本英恵氏、小西雄大氏、コーヒーカップの印象語の選別のアンケートにご協力頂いた古木瑞穂氏、杉谷舞氏、竹岡菜奈氏、六車優里氏、野口彩香氏、南畑成吾氏に感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費(17H07315)の助成を受けて遂行しております。ここに明記して感謝の意を表します。

◆閉会の挨拶: 関東支部支部長 近藤 俊明 (東京未来大学)

以上

* 閉会后、懇親会を開催した。

◆次回の支部例会のお知らせ:

- 日時: 2019年3月30日(土) 午後13:00 ~ 18:00(予定)
- 場所: 東京未来大学
〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12 / TEL:03-5813-2525
- 研究発表: 発表約25分、質疑応答約5分を予定
 - * 研究発表御希望の方は、発表テーマを3月5日(火)までに、要旨を3月19日(火)までに、支部事務局(東京未来大学 郭研究室: kaku.iyo@tokyomirai.jp)までお送りください。(要旨は500~800字程度、Word ファイルにてお願い致します。)
 - * 終了後、懇親会(会費5000円以内)も予定しております。奮ってご参加ください。